

ART KISS LETTER

TITLE

CAMKコレクション展 Vol.7
未来のための記憶庫

DATE

2023

4.29^(土) / 6.25^(日)

開館時間 10:00-20:00(展覧会入場は19:30まで)
休館日 火曜日

CAMK コレクション展 Vol.7

未来のための記憶庫

MEMORY STORAGE FOR THE FUTURE



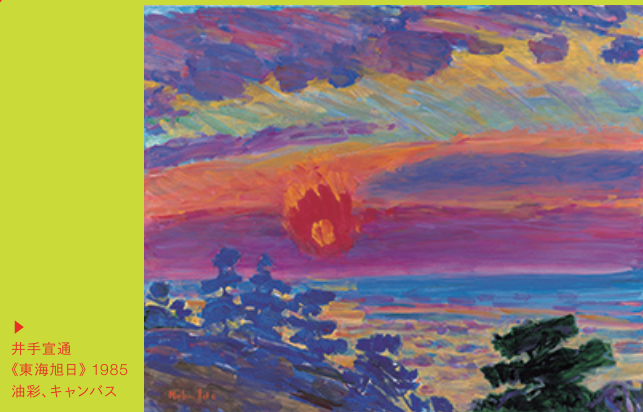
記憶庫から 記憶を 引き出してみる

イベント
記録

「未来のための記憶庫」展の初日に開催したイベント「記憶庫から記憶を引き出してみる」のようすをお届けします。展示会場をまわりながら、出展作品をめぐる記憶をそれぞれの関係者に語ってもらいました。

はじめに

佐々木: みなさんご来場ありがとうございます。本日のイベントは「記憶庫から記憶を引き出してみる」ということで、作品にまつわるいろいろな記憶をみなさんと共有するために企画をしました。昨年、熊本市現代美術館は20周年を迎えましたが、今回の「未来のための記憶庫」展はこの20年あまりの活動のなかで当館と熊本の地が積み重ねてきた文化的記憶を、コレクション作品約60件をとおして振り返り、また次の世代にも伝えていこうとするものです。現代美術館というのは、自ら展覧会を企画しながら、同時代の作家たちとともに時代の最前線に立てさまざまな表現を切り開くことに努めています。それと並行して、そこで制作された作品を収蔵していくことで、その成果をコレクションの形で蓄積することにも取り組んでいるわけです。今日は学芸員をはじめとする当館スタッフも参加してくれているのですが、彼らはそれぞれの作品について制作当時や展示当時の記憶を持っていますし、また来場者のみなさんのなかには「この作品、前に展示されていたときに見た!」という方もきっとおられるかと思えます。ですので、このイベントのなかでは、この展覧会のときにどんなことがあったとか、この作品を最初に見た時にどんなことを思ったとか、それぞれが持っている作品にまつわる記憶というのをシェアしていただければと思います。一般的な作品解説ツアーの場合だと、作家の経歴や作品の分析、時代的な位置づけなどの話になりがちですが、今日は個人の視点からのお話を積極的にいただければうれしいです。



▶ 井手宣通
《東海旭日》1985
油彩、キャンパス

熊本市現代美術館の設立をめぐる都市伝説(?)

佐々木: 最初のゾーンは「熊本の戦後美術」ということで、戦後に熊本の美術の状況をつくり上げていった作家たちの作例を紹介しています。ここに井手宣通さんの作品を展示していますが、この井手さんの作品がご遺族から熊本市へと寄贈されたことがきっかけで、熊本市での美術館設立の話が動き出し、当館のオープンにつながったという経緯があります。ちょっとここで、当時のことを知っている当館の副館長から、美術館オープンの前後の話をしてもらおうかなと思います。

岩崎: こんにちは、副館長の岩崎千夏と申します。井手さんの作品が熊本市に寄贈されたときは、私自身もまだ財団(編注:「熊本市美術文化振興財団」)のこと。現在、熊本市現代美術館の管理運営は同財団が担っている。)の職員ではなかったのですが、当初は熊本城の敷地のなかの建物を井手宣通記念館にしようかという話もあったようです。しかし地盤調査などでその案は難しいことがわかり、再考されることになりました。そのときに再開発の計画が進んでいたのがこの熊日会館のビルなのですが、その再開発に熊本市も加わってほしいという話がちょうど来ていたんですね。そうしてここに市の美術館をつくるという流れになり、私が就職する前の年度に、市議会で当時の市長が「熊本市の中心地に現代美術館をつくりたい」ということを表明しました。私も当時のことはよく知っているわけではないのですが、「この古風な熊本市になぜ“現代美術館”?’とみんな思ったようです。真相はわかりませんが、「“現代美術館”をつくる」と答弁する予定が、市長がうっかりして「“現代美術館”をつくる」と言ってしまった、という都市伝説のような噂もあります(笑)。市の美術館を“現代美術館”にしたことの一般的な説明としては、熊本県立美術館が近代までをカバーしている、それとの棲み分けということだと思うのですが。



▶ 熊本市現代美術館の開館記念式典のテープカットの様子。中央は当時の館長・田中幸人。その左が岩崎。(2002)

佐々木: 90年代半ばの話ですね。“現代の美術館”と“現代美術館”では意味が違ってきてしまいますが(笑)。ともあれその後、2002年に熊本市現代美術館が開館することになりました。次のゾーンは「同時代作家との伴走」ということで、当館の企画において発表された同時代作家の作品群を展示しています。

開館イベント 「ラスト・サマーナイト」と灼熱の記憶

佐々木: こちらの林浩さんの《Past》のシリーズは、当館のイベントで発表された作品と関連したものです。今はもうない赤レンガ倉庫という場所を会場にした「ラスト・サマーナイト」というイベントなのですが、当時のチラシにはまだ「熊本市現代美術館(仮称)」と表記されています。こちらの林さんの作品について、当時のことを知っている学芸員の坂本から話をしてもらおうと思います。



▲ 林浩《Past (family version)》、《Past (friend version)》2003 石膏、パネル

坂本: 学芸員の坂本颯子です。私は岩崎たちに次ぐタイミングで財団に入ったんですが、当時はまだこの熊日会館の建物は工事中で、私たちスタッフは市役所隣の駐輪場のビルのなかに居候していました。そのときに、「美術館はまだオープンしていないけどすでに動き出しているんだから、イベントをやろう」とそのときの課長たちが言い始めたんですね。その会場のひとつが、熊本駅の近くの赤レンガ倉庫(熊本合同倉庫)というところでした。すでになくなってしまった場所ですが、そこに熊本の作家を集めて展覧会をしようということになり、それに参加してもらった作家の一人が林浩さんでした。林さんの作品は、今回の展示作品のように「Past」と書かれた石膏のタイルを地面に敷き詰めたもので、初日はきれいに並んでいるのですが、来場者が会場に入って行ってそれを踏むたびにピシッ、ピシッと割れていき、最終日には石膏の塵になっているというものでした。

コミッション作品とまちの記憶

佐々木: こちらに大きくスペースを取って展示しているのは、2016年に発表された川内倫子さんの写真作品《川が私を受け入れてくれた》です。当館での川内さんの個展に際して制作されたいわゆるコミッション作品で、熊本各地の風景を撮影していただいたものです。ここでは、そのときに展覧会の担当を務めていた、学芸員の冨澤に少し話をしてもらおうかと思います。



▲ 川内倫子《川が私を受け入れてくれた》より 2016
発色現像方式印刷 ©Rinko Kawauchi

そのイベントで何を覚えているかといえば、何といてもエアコンがなくてすごく暑かったことですね(笑)。会場の監視をしなければいけないので、スタッフが交代で現場につくのですが、みんな「あつつい、あつつい!」と言って。演劇のイベントなどもしましたが、スイカを食べたり、最終日には作家たちとバーベキューをしたりもしました。肉を買い過ぎて、みんなでタッパーに入れて持ち帰ったという思い出もあります(笑)。林さんの作品は粉々になって形が消えてしまうものだったので、その後に変更して同じ石膏タイルを使って、壁にかけての展示ができて恒久保存もできる形の作品を制作してもらい、それを収蔵させていただいたというわけです。



▲ 赤レンガ倉庫での「ラスト・サマーナイト」(2001)の展示の様子。床面が林浩作品、正面壁面は前田信明作品。



▲ 最終日のバーベキューの様子。左が林浩さん、右は同じく出展作家の前田信明さん。

佐々木: 当時、「ラスト・サマーナイト」のようなイベントの来場者というのは、どんなかんじだったんでしょうか?

坂本: 林さんや他の作家さんたちも長く熊本で活動されていて、学校で教えていたりもしたので、けっこうひっきりなしにお客さんは来ていましたね。会期中には音楽ライブや演劇もあったし、美術館じゃない場所で美術の展示をやるということも、当時は珍しかったかもしれません。

冨澤: こんにちは、学芸員の冨澤治子です。いま振り返ると、熊本の方々とこの現代美術館というものを近づけるためのひとつの方法として、コミッション作品に取り組むということがあったと思います。当館の開館記念展の「熊本国際美術展 ATTITUDE2002」で、私はジュン・グエン=ハツシバという作家の担当となり、彼とともに水俣をテーマとした作品をつくるという経験をしました。作家と一緒に熊本の人や場所や歴史に触れながら新作の制作を進めて、それがやがて美術館や市民の記憶となっていき、という一連の流れを目にしたんですね。そんなこともあって、川内倫子さんに個展の依頼をしたときに「熊本の人たちと一緒に作品をつくってもらえませんか」というのを初めにご相談しました。それに対して川内さんからは、熊本の人たちからお気に入りの場所についてのエピソードを聴きたい、というリクエストがありました。熊本の四季を見たい、というのも川内さんの希望にあったので、展覧会が始まる1年くらい前からエピソードを募集しては川内さんに撮影をお願いするというスケジュールを開始しました。熊本在住の方だけでなく、現在は他所に住んでいるという熊本ゆかりの方も含めて募集をかけて、最終的に38名分のエピソードを採用させていただくことになりました。それらひとつひとつのエピソードにもとづいて、川内さんが熊本のあちこちに足を運び、撮影を進めたというわけです。 ウラハ





◀ 川内倫子さんによる
熊本各地での撮影の様子(2015)

この作品は空間全体がインスタレーションになっているのですが、写真だけでなく文字のテキストも含まれています。これらはみなさんの各エピソードから、一行ずつ抜き出してきたものです。これらのテキストを川内さんがリミックスするような形で、現代詩のようにひとつにまとめて、写真とともにセットで構成しています。「鯉を見に行こう」「雲ひとつない青空の日はとくに綺麗です」「夏の照りつける日差しはいやになる程、痛かった」…と続いていきますが、この全文は「川が私を受け入れてくれた」の作品集にも掲載しています。

この作品は毎回の展示空間ごとで写真とテキストの配置を調整していく必要があり、美術館で用意した空間にあわせて川内さんがレイアウトを指定してくれます。非常に有機的な展示空間となっていて、作品の配置は基本的に変わらないのですが、今回の展示ではテキストの順番が前回から少し変わっています。

川内展は2016年の熊本地震の直前に開催しましたが、このとき撮影した多くの風景が地震によって変わってしまいました。

たとえば熊本城の長堀ですね。いま、長堀自体は復旧されているのですが、その下でお花見をすることはできなくなってしまいました。この長堀の写真は、熊本に住ではない方のエピソードを参照して撮影したのですが、現在の実際の風景とは違った、人の記憶のなかの風景となっているといえるのかもしれない。あちらには熊本駅の「0番のりば」の写真がありますが、熊本駅も大きな再開発が近年おこなわれて姿を変えたので、このような風景もすでになつかしいものとなっています。また、みなさんご存知の橙書店の写真もありますが、ここに写っているのは新市街の路地裏にあった以前の店舗で、いまは練兵町に移っています。

この作品はそうように少しずつ変わっていく熊本のまちの記録にもなっていて、今では私たちの記憶のなかにしかないものと、まだ実際にあるものを行き来しながら鑑賞していくことになります。それもまた写真のおもしろさだと思います。



■ サラリーマン・コレクターの生きざま

佐々木：さて、私が担当した作品や展示についても少しお話ししたいと思います。

こちらは坂本夏子さんという熊本出身の80年代生まれの作家の《犬と坂道のアニメーション》という作品です。坂本さんは非常に力のある作品をつくる方で、2022年には当館の20周年記念展にも別の作品群を出展していただきました。

今回展示している「犬と坂道」の作品2点は、久留米の現代美術コレクターの甲斐寿紀雄さんという方が当館に寄贈してくださったものです。2019年に当館で甲斐さんのコ



▲ 坂本夏子
《犬と坂道のアニメーション》2014
映像

レクションを紹介する「MY NAME IS TOKYO KAI AND I AM AN ARTOHOLIC」という小企画展を開催しました。そのときに私はいろいろとご本人からお話を伺ったのですが、大きな資産を持っているタイプのコレクターでは決してなくて、普通のサラリーマンをしながらこつこつと作品を買い集め続けておられるんですね。格安航空券で東京に飛んでギャラリーをあちこち回り、分割払いで作品を購入する。そしてその支払いが終わりしだい、また次の作品を購入して、常に支払いに追われ続けているという…。調査のためにご自宅にも伺わせていただきましたが、倉庫などを借りているわけでもないで、生活空間のなかに作品の入った箱があふれているというかんじでした。こんな人が九州にいて、実はすぐ近くで生活しておられたのかと思い、非常に印象深かったのを覚えています。

そんな甲斐さんが、当館での展覧会の後に自身のコレクションのなかから何点かの作品を寄贈してくれまして、その一部がこの坂本夏子さんの作品というわけです。甲斐コレクションの企画は、一連の展示作品もさることながら、甲斐さん本人のパーソナリティーや生きざまもたいへん興味深く、いろんな形で美術作品と関わっている人がいるんだなというのを私自身も改めて実感した機会でした。

(後半に続く)



▲ コレクターの甲斐寿紀雄さん。
甲斐コレクション展の会場にて。(2019)

Art Gamadas

本トーク記録の後半はウェブ上の「Art Gamadas」に掲載いたします。
「Art Gamadas」は、熊本市現代美術館の展覧会や各種プログラムの記録を収録している活動報告誌です。



熊本市現代美術館

Contemporary Art Museum, Kumamoto

ART KISS LETTER Vol. 108(2023年8月)
編集：佐々木玄太郎 デザイン：橋本典(ピアフデザイン)
発行：熊本市現代美術館 www.camk.jp
〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500

